

英国におけるアルチュセール理論の一展開

—P. ハーストの場合—

A Developed Form of Althusserian Theory in Britain

—The Case of P. Hirst—

石 井 潔

Kiyoshi ISHII

(1990年10月11日受理)

Abstract

L. Althusser rigorously distinguishes between a 'real object' which exists external to thought and an 'object of knowledge' which is the work of theoretical production. He claims that it is only through the transformation of the latter by theoretical practices that we can appropriate the former in our thought. The view that a knowing 'subject' could directly compare the real object with the object of knowledge and decide whether the latter corresponds to the former is erroneous for him because it reduces the productive and objective knowledge process to the psychological one of the subject. He calls this view 'empiricism' and the knowledge which premise the subject 'ideology'. For him the ideological knowledge must be distinguished from the 'scientific' knowledge which is produced by the process without subjects and through which we can appropriate the real object.

But this dichotomy between these two objects imposes Althusser a difficult question how it is guaranteed that these objects correspond each other if the real object cannot be directly given to us. One of the ways to answer this question is to abandon the real subject to avoid the guarantee problem. P. Hirst, one of the Althusser's leading followers in Britain, takes this way. He argues that rejecting not only the knowing subject but also the real object is the coherent consequence of Althusserian theory and there exists only the theoretically constituted object of knowledge which he calls a 'theoretical discourse'. This discourse theory is very similar to the theoretical position of D. Hume who abolishes both subjects and objects independent of our 'experience'. Dispite its starting-point is a fundamental criticism of 'empiricism', Althusserian theory has developed an empiricist trend in Britain, the motherland of empiricism.

1. アルチュセールの「経験論」批判

アルチュセールのテキストを読むとき、我々は彼の「経験論 (empirisme)」という用語にある種の違和感をもつ。それは我々が哲学的な常識として知っている経験論と彼の定義する

「経験論」との間に大きな理論的隔たりがあるように思われるからである（以下、括弧付きの「経験論」はアルチュセールの意味でのそれを指す）。彼の定義によれば「経験論」とは、彼が「实在の対象(l'objet réel)」と呼ぶ客観的な实在が直接的に認識「主体(sujet)」に対して現前しようとする考える認識論的立場である。従って、「経験論的」認識過程とは認識「主体」が「实在の対象」の「本質」的部分を正確に「抽象」して「实在の対象」に適合する認識内容すなわち「認識の対象(l'objet de la connaissance)」を獲得する過程であるとされる⁽¹⁾。あるいは彼が好む比喻を使えば、鏡に映った像である「認識の対象」が「实在の対象」という実物を正しく反映しているか否かを鏡の役割を果たす認識「主体」が実物と像を比較することによって確認することができるとする立場が「経験論」であると言ってもよい⁽²⁾。

アルチュセールはこのような「経験論」の最大の欠陥が「認識の対象」を「实在の対象」のいわば似姿とみなすことによって「認識の対象」を「实在の対象」の単なる「表現(expression)」に還元したり、認識「主体」が自らの作用（実践や経験）を媒介として「实在の対象」をその写しである「認識の対象」として所有することができる点にあると主張する。例えばフロジストン説を信奉する化学者たちが脱燃素気体と呼びラヴォアジエが酸素と呼んだものは、「経験論的」立場からすれば同一の「实在の対象」の異なった「表現」にすぎない。従って認識「主体」がその同一の「实在の対象」の本質的な側面を「抽象」することによって作り出した写しであるという点で両者は完全な連続性をもっているということになる。しかしこのような「経験論」は我々が酸素という「認識の対象」を獲得するためには、ひとつの化学理論（フロジストン説とその燃焼理論）がもうひとつの化学理論（ラヴォアジエの燃焼理論）へと作り変えられなければならないという事実を無視している。燃焼に関する実験をいくら繰り返してもラヴォアジエの化学理論なしには「認識の対象」としての酸素を我々が手にすることはできない。新たな理論の「生産」と新たな「認識の対象」の獲得とはまったく同一の過程である。我々に与えられる「対象」はすべて、それが脱燃素気体であるにせよ酸素であるにせよ常にすでになんらかの理論を前提とする「認識の対象」に他ならない⁽³⁾。一切の理論抜きに「实在の対象」が「プディングの味はそれを食べてみればわかる」という言葉が示すような仕方で直接認識「主体」に対して現前することはありえない⁽⁴⁾。我々の認識とは認識「主体」が「实在の対象」の写しを作るのではなく、新たな理論とそれに伴う新たな「認識の対象」が「生産」されることなのであり、我々が認識という場面で「認識の対象」の外部の存在を参照することはいかなる意味でもありえない。従って「認識の対象」としての酸素が他の「認識の対象」と同一の「实在の対象」を「表現」というような「経験論的」な主張は成立ちえないし、「認識の対象」としての酸素を「实在の対象」と比較して前者が後者の正しい反映ないし「抽象」であるか否かという問いを立てることも本来的に不可能である。アルチュセールは「経験論的」認識論を以上のように批判する。

円と円の観念は別のものであり円の観念は实在の円のように丸くはないというスピノザの主張をアルチュセールが高く評価するのもそれが「实在の対象」としての円と「認識の対象」としての円を明確に区別することによって彼の言う「経験論」の欠陥を正しく指摘しているからである⁽⁵⁾。我々が円について何らかの観念（例えば中心と円周の距離はすべて等しいという観念）をもつということそれ自体が我々が円についての認識をもつということなのであり、实在の円と円の観念を比較して後者が前者の正確な写しであるか否かを確認するという作業は認識についての誤ったイメージを生み出す不必要かつ不可能な（円の観念は丸くないのであるか

ら実在の円と比べることはできない) 作業であるとスピノザは言う⁽⁶⁾。デカルトは我々が悪霊によって欺かれる可能性にさらされていることを根拠に三角形の内角の和は二直角であるという観念は「実在の対象」としての三角形の本性を正確に「表現」していないかもしれないと疑うところから出発する。このような懐疑論は必然的に「実在の対象」と「認識の対象」の一致を保証するものは何か、またいかなる基準を満たせば両者は一致するのかという問いを伴う。だからこそデカルトは「欺かざる神」なる仮定を必要としたのであった。これに対してスピノザはデカルト的懐疑論を拒否し、夢が夢であることに気づくためには夢から覚めなければならないのと同じように我々が何かを疑いさらにそれを虚偽であると断定するのはアルチュセールの用語に即して言えば新たな「認識の対象」が「生産」されそれと比較して従来の「認識の対象」が疑わしく偽りに満ちたものであるとみなされるようになる場合だけであり(ペガサスしか知らなかった子供がペガサスの存在を疑うためには彼が馬の存在を知ることが不可欠であるという例をスピノザは挙げている)、「認識の対象」がその外部の「実在の対象」と一致しているか否かを直接比較対照して真偽の判断が下されることはありえないと主張する。「真理は真理自身と虚偽との規範である」という一見きわめて独断的なスピノザのテーゼの真の意味は、何が真理で何が虚偽であるかはデカルトの「欺かざる神」のような「認識の対象」の外部の存在を持ち込むことによってではなく、絶えず加工され作り変えられる「認識の対象」の内部で「認識の対象」それ自体を基準として明らかにされるべきであるということなのである⁽⁷⁾。

2. 「経験論」批判と英国経験論

アルチュセールの「経験論」に対する批判の論点はこれまで述べてきたように非常に明確である。しかし論文の冒頭で指摘したように、彼の言う「経験論」と哲学史的な意味での英国経験論とりわけパークリーやヒュームのそれとの間には大きな理論的隔たりがあるように思われる。英国経験論者の末裔として「経験」の重要性を強調する立場から書かれた激烈なアルチュセール批判の書である『理論の貧困』のなかでトムソンが、コワコフスキーのアルチュセール論から次のような一節を引用しながら、アルチュセールの「経験論」批判は現実の経験論にはまったくあてはまらなないと決めつけているのもある意味ではもっともなことである。

「哲学史について基本的な知識をもっている読者なら、アルチュセールが＜経験論＞と呼んでいるものはアリストテレスやトマス・アクアナスの抽象に関する理論とは同一視されうるかもしれないが、近代の経験論ーロックよりもさらに少なくとも十四世紀の唯名論者たちにまでさかのぼることのできるそれが主張していることは彼が言う＜経験論＞の内容とはまさに正反対であるということにすぐ気づくであろう。⁽⁸⁾」

「経験論」の特徴は「認識の対象」を「実在の対象」の本質の「抽象」ないし写しであると考えるところにあるとするアルチュセールの指摘は確かにパークリーやヒュームの経験論には妥当しないように見える。むしろコワコフスキーの言うように話は逆であって、英国経験論の理論的核心は我々の知覚的経験の対象がその外部に存在する客観的実在の写しであるという考え方を論駁するところにこそあったのではないか。例えばパークリーは次のように言う。

「観念それ自身は心の外部には存在しないが観念がその写しないし類似物であるような事物は存在しうるし、そのような事物は心の外部に、思考しない実体の内に存在すると諸君は言う。それに対して私は観念は観念に似ることができるだけであり、ひとつの色や形はもうひとつの色や形に似ることができるだけであると答えよう。我々がほんの少しでも自らの思想を覗き見

てみれば、観念相互間を除いては類似性を考えることは不可能であることに気づくであろう。⁽⁹⁾」

パークリーがここで「観念」と呼んでいる知覚的経験の対象をアルチュセールの言う「認識の対象」と重ね合わせてみれば、我々に与えられた「対象」が客観的な実在の写しでない「抽象」であるとする認識論の拒否という点では、パークリーの主張とアルチュセールの「経験論」批判の間には対立どころか逆に重要な共通点があるとみなさざるをえない。パークリーの「存在するとは知覚されることである」という有名なテーゼは単なる唯心論的なテーゼとしてではなく、「実在の対象」の似姿には還元されえない「認識の対象」独自の領域を確立することをめざすテーゼとして読まれることができるのである。トムソン自身はアルチュセールに対するバランスのとれた評価を最初から放棄しているために無視しているが、アルチュセールの「経験論」批判は意外にも少なくともその一面においてはきわめて経験論的なものである。

直接的な影響関係はまったくないが英国経験論を積極的に評価することを通じてアルチュセールの「経験論」批判のもつ経験論的な側面と基本的には同じ結論に達しているという点で、小川弘氏の仕事は注目に値する。小川氏は客観的な実在を直接に端的に把握することが可能でありこの客観的な実在と意識所与とを比較することによって真理と虚偽を区別することができると思う認識論的立場を「素朴実在論」と呼び、このような素朴実在論と手を切ることが正しい意味でのマルクス主義認識論を作り上げる上での前提条件であると主張する。ドアを開けて誰かがドアの外にいるかどうかを確かめてみるといった知覚的な認識においても、予想事実と実験事実の比較によって理論の真理性を確認するといった科学的認識の場面においても我々に与えられる対象は常に意識所与のみであり、客観的な実在が直接現前することはありえない。英国経験論が決定的な意義をもつのは前近代的な宗教的意識の残存物にすぎない客観的な実在の直接的現前という一種の信仰を最終的に葬りさり、対象が我々に現前するのは意識所与としてのみであるという事実（小川氏はこれを「反省的意識の事実」と呼ぶ）、アルチュセールの言えは我々の認識過程は終始一貫して「認識の対象」の内部にあるという事実を確認した点にある。小川氏はこのように言う。英国経験論こそマルクス主義的な認識の基盤となるべき知覚的経験の領域をゆるぎなきものとして打ち立てた偉大な思想なのであり、反マルクス主義的な唯心論的観念論というしばしば見受けられる評価は完全な誤解に基づくものであるとされるとされるのである⁽¹⁰⁾。

アルチュセールの「経験論」批判がもつこのような経験論的側面は経験論の強い伝統の下にある英国においてP. ハーストをその代表的な人物とするアルチュセール理論の経験論的受容とでも呼ぶしかない潮流を生み出した。もちろんアルチュセール理論が経験論に還元されえないことは自明であり、そのような受容の仕方が一面的なものであることは言うまでもない。しかしアルチュセール理論の受容の諸可能性を明らかにし、その「可能性の中心」をさぐる上で、この潮流の分析は重要な意義をもっている。

3. 理論と経験

英国におけるアルチュセール理論受容史のなかでハーストもその出版にかかわった雑誌『理論的実践』は先駆的な役割を果たした。1971年にアルチュセールの英訳者として有名なブルースターらを編集委員として登場したこの雑誌は結局短命に終わったが、その名も示す通りマルクス・レーニン主義「理論」の重要性を強調し「アルチュセールが成し遂げたことから出発す

る⁽¹¹⁾」ことを明確に宣言した英国における初めてのアルチュセール派の雑誌であった。1972年に出たその第二号に「アルチュセールと哲学」と題する論文を書いてデビューしたハーストは、1975年のヒンデスとの共著『前資本主義的生産様式』に至るまでアルチュセールの影響のきわめて強いいくつかの著書、論文を発表した⁽¹²⁾。1976年以降の理論的展開のなかで彼はアルチュセール理論の基本的なテーゼを否定することになるが、そのようないわば「決別」後も「アルチュセールが出発したその精神のなかで仕事をすることをめざしている」と述べており⁽¹³⁾、その主張に賛成するか否かはともかくとして彼をアルチュセール理論の受容を通じて自分自身の思想を作り上げた英国における第一人者とするには問題はないであろう⁽¹⁴⁾。

しかしハーストのアルチュセール理論受容を経験論的と呼ぶことにはかなり無理があるように見える。さきに触れた『理論の貧困』でトムソンは逆にアルチュセール理論の本質である具体的な経験の軽視と理論偏重主義が極限にまで押し進められた典型としてハーストらの『前資本主義的生産様式』をあげ、マルクス主義「理論」と歴史的経験は無関係だと断定する彼らの次のような主張を怒りを込めて引用している。すなわち「歴史はその対象の本性からして経験論的であるという非難を受ける」に値するものであり、「歴史的実践という経験論者たちの主張にもかかわらず、歴史という実在の対象は認識に接近することはできない。」従って、「理論的および政治的実践としてのマルクス主義は、歴史的記述や歴史的探求と結びつくことからは何も得ることはない。歴史の研究は科学的にだけでなく政治的にも無価値である⁽¹⁵⁾。」

確かにハーストは、この著書のなかで理論をまったく前提としない純粋な歴史的「経験」や「事実」が存在することを否定し、そのような所与の「経験」や「事実」からマルクス主義「理論」を導出することができるとする考え方に明確に反対している。例えば「封建的生産様式という概念は歴史的に〈与えられた〉ある特殊な封建的社会からの一般化によって作り出されたものではなく」「理論的な仕事によって作り出されたものであり」「その理論的地位と妥当性は生産様式の一般の定義を特殊化する諸概念の領域の内部でのみ決定されうる」と彼は主張する⁽¹⁶⁾。「理論」は「理論」からのみ生み出されるのであって「理論」の外部の「経験」を参照することは「無価値である。」このような発言が英国経験論の守護者たらんとするトムソンの逆鱗に触れたのは当然である。しかもハーストは1977年の『生産様式と社会構成体』で、この著書が合理主義的な偏向に陥っていた点を自己批判した後も、「理論」を前提としない所与の「経験」は存在しないという論点に関してはトムソンに対して少しも譲歩していない⁽¹⁷⁾。

「認識の対象」が「実在の対象」の写しであることを拒否するという経験論的側面をもちながらもアルチュセール理論が決して経験論に還元されえない最大の理由は、この両者の対立が指し示しているようにアルチュセールが「理論」をまったく前提としない所与の「経験」なるものの存在を認めないということである。ハーストはあまりにも極端であるとはいえこの点ではアルチュセールに忠実であると言ってよい。アルチュセールの立場からすれば、幾何学やラヴォアジエの化学理論が「経験」に基づいているかいないかといった問いは成立しない。「理論」を前提としない「経験」は存在しないのであるから、「理論」と「経験」を比較して前者は後者に基づいているとか、前者は後者を正しく「表現」ないし「反映」しているとかいう言い方は意味をなさない。例えば1840年代のマルクスの著作（『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』）は具体的な歴史的「経験」と結びついていたが1850年代以降の『要綱』や『資本論』は「ポリティカル・エコノミー」の問題設定に引きずられて「経験」と切り離された抽象的な経済法則の「理論」に墮してしまったというトムソンのマルクス評価⁽¹⁸⁾は、「理

論」が「経験」に基づいているか否かを基準として「理論」を評価しようとする試みの典型である。しかし、このようなやり方は「理論」という「認識の対象」が「経験」という「実在の対象」の正しい写しであるのか否かを問うことと結局は同じであり、これはまさにアルチュセールの言う「経験論」にぴったり一致する。

パークリーは等辺でも不等辺でも直角でもない「経験的には」存在しえない三角形の抽象観念を形成することができるという考え方を否定し、我々が三角形について何ごとかを論証できるのは常に「経験的に」与えられた特殊な三角形に関してのみであると主張する⁽⁹⁾。スピノザ的な丸くない円の概念なるものはパークリーから見れば「経験」に基づかない抽象「理論」にすぎない。「経験」に基づかない「理論」を拒否するトムソンはパークリー以来の英国経験論の伝統を正しく継承しているのである。アルチュセールが英国経験論もまた知覚的经验の対象という「実在の対象」の写しが「認識の対象」である点では「経験論的」問題設定の枠内に留まっていると判断したのは決して単なる誤解ではなかった。アルチュセールは「理論」を前提としない所与の「経験」が存在するという英国経験論の主張をそれが「経験論的」であるが故に退ける。ハーストがこの点でアルチュセールに忠実であるとすれば、彼のアルチュセール理論受容を経験論的と呼ぶ余地はないのではないか。

4. ハーストのエピステモロジー批判

ハーストとアルチュセールの最大のそして決定的な違いは、ハーストが新たな「認識の対象」の生産による「実在の対象」の「領有(appropriation=Aneignung)」というアルチュセールの基本的なテーゼを否定するところにある⁽¹⁰⁾。アルチュセール自身は「認識の対象」が「実在の対象」の似姿であるという主張は認めないが「認識の対象」の外部にそれとは区別された「実在の対象」が存在し新たな「認識の対象」の生産を媒介として「実在の対象」がより深く認識されるという立場を捨てたことは一度もない。またこのような立場に立たない限り、新たな「認識の対象」の生産によって「実在の対象」に接近する「理論的实践」である「科学」と「主体」としての諸個人と現実との間の「想像的な(imaginaire)」関係の「表象(representation)」をもたらすのみで「実在の対象」についての認識を与えない「理論的实践」である「イデオロギー」との峻別というアルチュセール理論の最も根本的な枠組み⁽¹¹⁾を維持することはできない。しかし、「実在の対象」の「写し」と「領有」とがどう違うのかを説得的に論証することが困難な課題であるのは確かである。従って「認識の対象」の外部に「実在の対象」が存在しその両者の関係について語ることができるとする問題設定そのものを「エピステモロジー」と呼んで拒否するハーストのような主張が出てきても不思議ではない。

『生産様式と社会構成体』以降ハーストはアルチュセールが「認識の対象」と名付けたものをそれが「理論」によって構成されているという意味で「理論的言説(theoretical discourse)」ないし単に「言説」と呼ぶようになる⁽¹²⁾。まだ用語自体は確定していなかったものの『前資本主義的生産様式』の段階ですでにその結論においてハーストはマルクス主義的な「言説」の対象を「言説」の外部に存在し「言説」によって指し示される「実在の対象」と考えるのは誤りであり逆に具体的な政治的实践の対象である「現局面(current situation)」はそのような実践と緊密に結びついた「理論」が構成する「言説」を通じてはじめて新たに作り出されるものでありまた絶えず作り変えられるものであると主張している。レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』の対象は決して19世紀後半のロシアについての一連の観察可能な事

実ではなく、ナロードニキの政治路線との対決という彼の政治的実践と結びついた理論的問題（前資本主義的生産形態の存在条件を資本主義的機構が破壊するのは何故なのか等）によって構成された「言説」がその対象すなわち「現局面」を形作っている。レーニンのいかなる統計をもってしても自分が問いかけている問題は解決されないという言葉の意味はそこにある。このようにハーストは言う⁽³⁰⁾。「实在の対象」の「領有」という問題はここではほとんど姿を消しているように見える。しかし『前資本主義的生産様式』の自己批判」という副題をもつ『生産様式と社会構成体』のなかでハーストは『前資本主義的生産様式』特にその序論は「エピステモロジー」との決別が不十分であったために『資本論を読む』のアルチュセールやバリバルがもっていた合理主義的偏向から完全に抜け出すことはできなかったと総括している。では「エピステモロジー」とは何か。また彼はそれをどのように克服しようとするのであろうか。

ハーストは「言説」から独立の「対象」が存在し、ある特権的な「言説」がその「対象」を指し示す手段を提供することができるとする考え方を「エピステモロジー」と呼ぶ。例えば「経験主義的エピステモロジー」は人間「主体」の経験に対して与えられるものに特権的な地位を認め、また「合理主義的エピステモロジー」は实在の合理主義的秩序を反映する概念に特権的な地位を認める⁽³¹⁾。ハーストによれば『資本論を読む』は、「科学的問題設定」によって導かれた「主体なき過程」という理論的実践に独断的に特権的な地位を認めているという点で、典型的な「合理主義的エピステモロジー」の立場をとっている⁽³²⁾。『資本論を読む』が『資本論』を中心とするマルクス主義理論の基本概念と両立しないという理由で理論的ヒューマンズムやヘーゲル主義的歴史観を退けたり、生産様式の一般理論が可能であり特殊な諸生産様式とそれらの生産様式の組合せである社会構成体の諸形態はそのような一般理論から導出することができると考えるのも、それが「科学」的な理論的実践によって「言説」の対象を領有することができるという前提、換言すれば理論が实在を反映しているという合理主義的な前提から出発しているからなのだと彼は言うのである⁽³³⁾。そしてさらに彼は『前資本主義的生産様式』は理論が言説の対象を指し示すものではなく常に「現局面」とかわることによってのみ意味をもつことを明らかにしまた生産様式の一般理論という構想を拒否した点では『資本論を読む』と一線を画するものではあったが、なお特殊な生産様式の概念の分析によって基本的な諸概念の再定式化が可能であると考えていた点で『資本論を読む』の「合理主義的エピステモロジー」から十分脱却していなかったとかつての自らの立場を自己批判する⁽³⁴⁾。先に引用した『前資本主義的生産様式』の序論に見られたような極端な理論主義はこうして撤回されることになる。

しかし前にも述べたようにだからといってハーストが理論を前提としない純粋な経験のもつ意義をそのまま再評価するわけではない。ハーストと同じく生産様式の一般理論という発想を自己批判するに至ったバリバルが経済と他の諸審級の関係は階級闘争によって規定された具体的な社会構成体のなかでしか把握されえないと主張したのに対して、ハーストはそのような自己批判は経済という審級を実体化したままで理論化できない他の経済外的な諸審級を経験の領域に委ねる経験主義にすぎないという批判を加えている⁽³⁵⁾。またもともとアルチュセール自体が理論によって領有することのできない経済外的な要因を対象化するために理論的な位置づけの曖昧な人間「主体」の経験という領域を必要としていたとも指摘している⁽³⁶⁾。つまり経済的審級は「理論」によって把握し経済外的審級は「経験」によって把握するというやり方は「合理主義的エピステモロジー」を「経験主義的エピステモロジー」で補っただけであり、

真の意味で合理主義的偏向から抜け出すためには理論や経験によって把握されうる「言説」外的な対象が存在するというエピステモロジーそのものを拒否しなければならないとハーストは主張するのである。彼にとってエピステモロジーの拒否とは具体的には経済的審級が他の諸審級とは異なった客観的実在性をもつことを前提とする「生産様式」という概念を放棄し生産諸関係とその存在諸条件の結合体である「社会構成体」をそれに代わる分析の対象とすることを意味する。

5. 「現局面」の経験論

「社会構成体」は「生産様式」とは異なって、経済という特権的な審級によって全体的な構造を決定された統一体ではない。従って一方に「経済による最終審級における決定」を置き、もう一方に経験的偶然性の領域を認めるといったアルチュセールの二元論とは無縁である。そこでの中心的な問題は、特定の「行為者(agent)」が生産手段を所有し、それ以外の行為者が生産手段から分離されるような生産諸関係とその存在諸条件すなわち法、政治、生産力水準、技術的分業などとの関係である。生産諸関係は常にこれらの具体的な存在諸条件との関連において分析されるべきであり、生産過程における直接的生産者とその搾取者という経済的審級の特権的な地位を前提とした図式のみに基づく生産関係の把握は無効である。ハーストはこのように主張する⁽³⁰⁾。確かに理論によって認識することができる客観的実在としての経済がすべてを決定するという「経済主義」ないし「本質主義」はこれによって否定される。しかしでは彼自身の社会構成体の理論とその理論によって構成された言説はどのような意味で正しいと言えるのであろうか。例えば社会を認識する上で生産関係に注目することが何故に重要なのか。理論が客観的実在を指し示すものであることを否定した以上、どんな理論でもかまわないということにならざるをえないのではないか。

ハーストは経済が特権的な地位をもたない以上、経済の審級における資本主義から社会主義への転換のみを「革命」と呼びその他の審級での変革を非本質的な単なる「改良」にすぎないものと見なすことは誤りであるであると主張する。そして議会での多数派形成や労働者の経営参加を通じて生産手段に対する左翼の側の実質的な管理能力を高めていくことを社会主義戦略の中心に据え、そのような闘争から切り離された経済構造の根本的変革としての「革命」は存在しえないという立場をとる⁽³¹⁾。彼の社会構成体の理論がこのような政治的立場の反映であることは明らかである。彼は自らの言説が社会主義者としての彼の政治的实践を反映しているというこの事実を積極的に肯定する。政治的实践と無関係に客観的実在を反映する理論が存在しそれが個々の具体的な政治状況に対して適用されると考えるのは現実的な政治に携わることのない無力な左翼だけである。我々の理論とそれに基づく言説は政治的实践と結びつくことによってその対象である「現局面」を作り出すのであって、「現局面」の外部からそれに対して適用されるのではない。『前資本主義的生産様式』の結論において提起された理論と実践の統一の場としての「現局面」という観点がここでは基本的に踏襲されている。ハーストからすれば彼の社会構成体の理論を政治的实践の「現局面」から切り離して、その理論自体としての正しさはどのようにして証明されるのかと問うことはまったく無意味である。「現局面」の様々な諸課題に応えうる理論であるのかそれとも自らの内に閉じ込める無力な一般理論にすぎないのか。彼にとってはそれだけが唯一の問題なのである⁽³²⁾。

このようなハーストによる「現局面」の重視は基本的には英国経験論と一致する。確かに理

論を前提としない所与の経験が存在するか否かという論点をめぐって両者の間には越えがたい溝があるように見える。しかし英国経験論が経験に基づかない理論を拒否するのは、バークリーの三角形の抽象観念に対する批判が示しているように客観的実在を直接把握することのできる理論が存在し我々の知覚的経験はその理論によって把握される実在の写しにすぎないという考え方を否定するためなのであって、決して理論一般の否定を意図しているわけではない。トムソンの理論偏重主義に対する嫌悪もあくまでそのような意味での理論を念頭においたものであり、時代と場所を越えた均一な経験と理論一般を対置し前者を基準として後者を批判しようとしたものではない。実在の対象を把握しうる一般理論が存在するというアルチュセールの主張を合理主義的エピステモロジーに陥っていると批判し、絶えず現局面に立ち帰りそこから出発すべきであると説く限りにおいてハーストと英国経験論は多くの共通点をもっている。それが最もよく表れているのが「現局面」から切り離された一般理論に対する徹底的な否定的態度である。彼は生産様式の一般理論を否定するだけでなく、商品生産社会の社会関係から法の一般理論を導出しようとするパシュカーニス⁽³³⁾、自然とは区別されたものとしての文化の一般理論を作り上げようとする文化人類学を初めとする様々な試みから監視や刑罰に関する一般理論までもとなくあらゆる一般理論を「現局面」のもつ複雑さと具体性に照らして否定する⁽³⁴⁾。これはまさに経験に基づかない抽象理論を否定する経験論のやり方とまったく同じである。生産様式の一般理論を否定する点で、ハーストもトムソンも共に概念的思考一般を退ける「具体性の形而上学」の立場を共有しているというキャリニコスの指摘は、その評価を別にすれば完全に正しい⁽³⁵⁾。

いわば「現局面の経験論」とでも呼ぶしかない以上のようなハーストの立場は、アルチュセール理論の二つの側面の内の一つを極限にまで拡大したものとも言える。これまで述べてきたようにアルチュセールの「経験論」批判に代表される側面すなわち認識の対象が実在の対象の写しであることを否定し前者の後者に対する独自性を強調しようとする側面を拡大して行けば「実在の対象」抜きの「認識の対象」である「現局面」が重視されることになるのは当然である。レーニンの「現局面」という概念を高く評価したのはもともとアルチュセール自身なのであるから、このような側面を継承したハーストがその精神においてアルチュセールに忠実であると自称するのは不当なことではない。しかしアルチュセール理論の経験論的側面のみを継承すれば必然的にもう一つの科学とイデオロギーの峻別という側面は無視されざるをえない。この点でもハーストはきわめて徹底している。

アルチュセールのイデオロギー論のうちでハーストが評価するのはイデオロギーの物質性という主張のみである。イデオロギーがイデオロギー装置という物質的な基盤をもつ独立した存在であり、「物質」的な土台である経済の単なる「観念」的な表象には還元されえないことを明かにしたのがアルチュセールの主要な功績であるとハーストは言う⁽³⁶⁾。経済のみに客観的実在性を認める経済主義を批判の対象とするハーストは、確かにこの点ではアルチュセールと完全に一致しているのである。

しかしハーストから見ればその他の点ではアルチュセールはいわばエピステモロジーに汚染されている。アルチュセールは常に「主体なき過程」である科学が「実在の対象」を領有するという合理主義的エピステモロジーを前提しているために科学と対置されるイデオロギーは逆に「主体」を不可欠の構成的カテゴリーとする諸個人と現実との想像的な関係の表象として定義されざるをえない。アルチュセールは諸個人がもともと「主体」として生まれるのではなく、

イデオロギー装置のなかの「呼びかけ(interpellation)」のメカニズムによって「主体」として構成されると主張する点で単純な理論的ヒューマニズムのように無批判に人間が「主体」であることを前提としているわけではない。しかしなぜ「主体」やそれと表裏一体の関係にある「想像的」といったカテゴリーが特権的な地位を占めうるのかをアルチュセールは説明していない。統一的な実体としての「主体」なるカテゴリーは彼自身の挙げている実例に見られるようにキリスト教的な人格概念を色濃く反映していることは明白であり、また例えば「行為者」としての株式会社を「主体」として扱うのは不可能である。結局のところ「諸個人は常にすでに主体である」であるという命題が示しているように彼もまた諸個人が主体であることを独断的に断言しているにすぎない⁽⁷⁾。実在の認識を与える「主体なき過程」と実在の表象しか与えない「主体を伴った過程」というエピステモロジーを下敷とした二元論以外に「主体」の特権性を支えるものはない。アルチュセールがイデオロギー装置を経済的な諸関係の再生産という観点からしか見ないのも、依然として彼が客観的実在としての経済とその表象としてのイデオロギーという図式から脱却していないからなのだ⁽⁸⁾。このようにハーストはアルチュセールのイデオロギー論のうちで彼の「現局面」の経験論に還元しえない科学とイデオロギーの峻別に関する一般理論の側面を徹底的に否認するのである。

もちろんハースト的な「現局面」の経験論に対しては英国内でも厳しい批判が寄せられた。それらの多くは理論的には実在論、政治的には階級闘争の立場に立って、ハーストが理論的には主観主義ないし相対主義、政治的には改良主義に陥っていることを批判するものであった⁽⁹⁾。またこれらの批判者はハーストとは逆にアルチュセール理論の受容されるべき側面は科学とイデオロギーの峻別に代表される実在論的あるいは科学主義的な側面であって経験論的な側面ではないと主張する場合がほとんどである。アルチュセールの「可能性の中心」はいったいどちらの側面にあるのか、あるいは矛盾する両者を合わせもっていた点にこそ彼の偉大さがあるのか。回答は容易ではない。しかし少なくとも彼の理論がいかなる可能性をはらんでいるのかを理解することは、そこから何かを学んでいく上での出発点にはなるはずである。

<注>

- (1) L.Althusser/E.Balibar, *Lire le Capital* (LC と略記), Maspero, 1968, nouvelle édition, pp. 38-45. (権他訳『資本論を読む』合同出版、1974年、42-50頁)
- (2) LC, pp.61-4. (65-8頁)
- (3) LC, pp. 5-22. (212-219頁)
- (4) LC, pp. 67-73. (72-7頁)
- (5) LC, p. 46. (51頁)
- (6) B.Spinoza, *Tractatus de Intellectus Emendatione*, in Spinoza Opera, hrsg. von C.Gebhardt, Carl Winter, 1924, pp.14-5 (畠中訳『知性改善論』岩波書店、1968年、30-32頁)
- (7) この点については以前に別の場所で論じたことがある。
石井潔「反懷疑論の戦略」静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)第36号、1985年参照。
- (8) E.P.Thompson, *The Poverty of Theory & Other Essays* (PTと略記), Monthly Review 1978, p. 193.

- (9) G.Berkeley, *The Principles of Human Knowledge*, in *The Works of George Berkeley* Bishop of Cloyne vol.2, ed. by T.E.Jessop, Nelson, 1979, p. 44 (大槻訳『人知原理論』岩波書店、1958年、48-9頁)
- (10) 小川弘『近代哲学の原点』弘文堂、1971年。
- (11) *Thoretical Practice* 1, 1971, Editorial, p. 1.
- (12) 代表的なものは、
P.Hirst, *Durkheim, Bernard and Epistemology*, RKP, 1975.
- (13) P.Hirst, *Marxism and Historical Writing* (MHW と略記), RKP, 1985, p. 134.
- (14) ハーストの理論的軌跡のきわめて批判的な紹介としては以下のものがある。
G.Elliot, *The Odyssey of Paul Hirst*, in *New Left Review* 159, 1986, Sep./Oct. PT, p. 2.
なおトムソンのこの本の出版を契機とする「理論」と「経験」をめぐる英国における論争については、市橋秀夫「E. P. トムソンー経験の政治学」『クリティーク』7、1987年、参照。
またトムソンのアルチュセール批判に対する比較的バランスのとれた批評としては、P.Anderson, *Arguments within English Marxism*, Verso, 1980, chap.1-4.がある。
- (16) B.Hindess/P.Q.Hirst, *Pre-capitalist Modes of Production* (PCMPと略記), RKP, 1975, p. 2.
- (17) MHW, p. 88.
- (18) PT, pp.59-63.
- (19) Berkeley, op.cit., pp.32-5. (27-31 頁)
- (20) LC, p. 65 (69 頁)
- (21) L.Althusser, *Idéologie et appareils idéologique d'Etat*, 1970, dans *Position*, Éditions sociales, 1976, p. 114. (西川訳『国家とイデオロギー』福村出版、1975年、58 頁)
- (22) B.Hindess/P.Hirst, *Mode of Production and Social Formation* (MPSFと略記), Macmillan, 1977, p. 7.
- (23) PCMP, pp. 322-3.
- (24) MPSF, pp. 10-11. (25) MPSF, p. 12.
- (26) MPSF, p. 31. (27) MPSF, p. 46.
- (28) MPSF, pp. 34-5. (29) MPSF, pp. 28-30.
- (30) MPSF, pp. 24-6, 46-57, 63-72.
ハーストがかつての『理論的实践』グループの同僚たちと共にこれらの点についてさらに詳細に展開したものが、
A.Cutler/B.Hindess/P.Hirst/A.Hussain, *Marx's Capital and Capitalism Today* 2vols, RKP, 1977 (岡崎他訳『資本論と現代資本主義Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局、1986-8年)である。
- (31) ハーストの具体的な政治戦略については、前掲書および MHS, chap. 7-8. の他に、
P.Q.Hirst, *Law, Socialism and Democracy* (LSDと略記), Allen & Unwin, 1986 参照。
- (32) MPSF, pp. 58-62.

- (33) cf. P.Hirst, *On Law and Ideology* (LIと略記), Macmillan, 1979, pp. 96-176, LSD, chap. 2.
- (34) cf. P.Hirst/P.Woolley, *Social Realations and Human Attributes*, Tavistock, 1982
- (35) A.Callinicos, *Is There a Future for Marxism ?*, Macmillan, 1982, pp. 190-1.
- (36) LI, pp. 13-4, 27-9.
- (37) LI, pp. 57-68.
- (38) LI, pp. 43-57.
- (39) cf. T.Benton, *The Rise and Fall of Structural Marxism*, Macmillan, 1984, chap. 8. /
Callinicos, op.cit., Elliot, op.cit.